

旧歯科診療棟（F、G、H棟）の 改修工事について

旧歯学部附属病院の建物は昭和48年に竣工し、その後、2回にわたる増築（昭和57年、平成9年）が行われました。平成15年に医学部附属病院と歯学部附属病院が統合され、医歯学総合病院が設置されました。平成24年の医歯学総合病院外来棟の新築後、歯学部校舎大型改修工事の一時移転場所として使用されていましたが、平成27年度と同改修工事の竣工後、空きスペースとなっていました。この跡地利用については本部主導のサウンディング調査により検討が進められましたが、成案が得られず、医歯学総合病院主導で跡地整備計画がすすめられてきました。令和元年秋より、旧歯科診療棟の改修工事が始まり、令和2年3月末に「新潟大学ライフイノベーションハブ」として

竣工予定となっています。この改修工事では、H棟をイノベーションセンターに改修し、旭町部局、全学センターの共通施設として使用し、また旧技工士学校、口腔外科診療室のあったG棟を取り壊し、その跡地を駐車場として整備することになりました。利用希望面積に応じて改修費用を案分し、工事費を賄うこととしましたが、歯学部ではこのうち204m²を使用することとし、F棟2階に106m²の講義室を、また3階に98m²の講義室を新設することとしました。計画では3階の講義室はスクール形式の講義に加え、アクティブラーニングを目指したWSや演習に対応できる教育設備を導入する予定にしています。

平成30年度科学研究費採択状況について

文部科学省は科学研究費助成事業の中区分別採択件数上位10機関、いわゆるトップテンランキングを公表しています。歯学部は昨年度は全国6位でしたが、2年間累積新規採択件数85件となり、今年度は5位となりました。累積新規採択率は

45.0%で、これは全国2位の採択率でした（1位は大阪大学で48.4%）。しかしながら、1課題あたりの配分額は1,869千円（全国7位）で、基盤研究Cから基盤研究B以上の申請の移行および採択が課題となっています。

文部科学省2019年度「国費留学生の優先配置を行う特別プログラム」の採択について

このたび、本学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻が応募していた「超高齢社会における歯科医療リーダー養成プログラム」が文部科学省事業2019年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択されました（https://www.mext.go.jp/content/1423005_1_1.pdf）。この事業は国公立大学大学院が実施する国際的に魅力のある留学生受入れプログラムを文部科学省が選定し、優先的に国費外国人留学生の配置を

行うものです。本専攻は摂食嚥下障害治療や再生医療など先駆的な高齢者歯科医療の提供を行っており、このプログラムでは優先配置期間にASEAN諸国におけるリーダー候補の発掘とその育成を目指します。事業期間は令和2年1月から3年間で、毎年、国費留学生5名が配置されます。全国歯学部では本専攻を含め、3プログラムが採択されました。

大韓民国・ソウル国立大学歯学部との部局間交流協定締結について

新潟大学歯学部は大韓民国・ソウル国立大学歯学部と部局間交流協定の締結を行いました。10月3日（木）に前田歯学部長が同大学歯学部を訪問し、部局間交流協定書に署名を行いました。ソウル国立大学は多くの単科大学を前身に総合大学として1946年に設立され、3つのキャンパスに16学部、1大学院、9専門学校を配置し、17,000人の学部学生と11,000人の大学院学生を擁しています。2019年QSランキングでは大学として60位にランクされている韓国のトップスクールです。またソウル国立大学歯学部は1922年に設立された長い歴史をもつ歯学部であり、上海アカデミック世界ランキング2019では32位にランクされていま

す。本協定の締結により、歯学部学生の相互交流や教員、大学院生の研究交流が期待されます。



調印式後の記念撮影

タイ・ナレスアン大学歯学部との 部局間交流協定締結について

新潟大学歯学部はタイ・ナレスアン大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。タイ国歯学部との協定締結は9校目となります。11月19日(火)に前田歯学部長、魚島副学部長(国際担当)が同大学を訪問し、両学部の概要説明の後、Anuphan Sittichokechaiwut歯学部長と交流協定書に調印しました。調印式後には、魚島教授から「The overview of elderly dental care in Japan」と題する講演が行われました。ナレスアン大学はタイ中部のピサヌローク市に位置し、タイ国内で5位にランクされています。同歯学部は1997年に学生数30名として設置されまし

た、現在では5大講座にまで発展しています。ナレスアン大学歯学部との関わりは大学院教育改革支援プログラム(大学院GP)が採択された2008年まで遡ることができ、大学院GP時には事業推進協力校をお願いしていました。ナレスアン大学歯学部は幅広い学生交流に加え、教員間の共同研究を希望しています。なお、調印式開始前にKanchana Ngourungsi学長を表敬訪問し、同学長から実り多い国際交流推進を依頼されました。部局間交流協定を受け、4月より同大学歯学部から大学院生1名が口腔生命科学専攻に入学することとなりました(口腔病理学専攻)。



左上：両学部長による協定書の交換、右上：ナレスアン大学学長との記念撮影
下：交流協定調印式後の記念撮影

インドネシア・スマトラウタラ大学歯学部、 ハントゥア大学歯学部との部局間交流協定の締結について

令和2年2月10日に、かねてより海外交流の要望が寄せられていたインドネシア・スマトラウタラ大学歯学部とハントゥア大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。

スマトラウタラ大学歯学部は1961年に設置され、インドネシア北スマトラ州メダンに位置する国立大学歯学部で、またハントゥア大学歯学部は1998年に設置され、東ジャワ州スラバヤに位置す

る私立大学歯学部です。両大学ともに本学歯学部との交流はこれからですが、先方は歯学部学生交流を中心としたネットワーク形成、基礎研究にかかる技術指導、大学院生・教員の研究交流などの活発な交流を望んでいます。この2校との協定締結により、インドネシアの歯学部との部局間交流協定校は6校となりました。



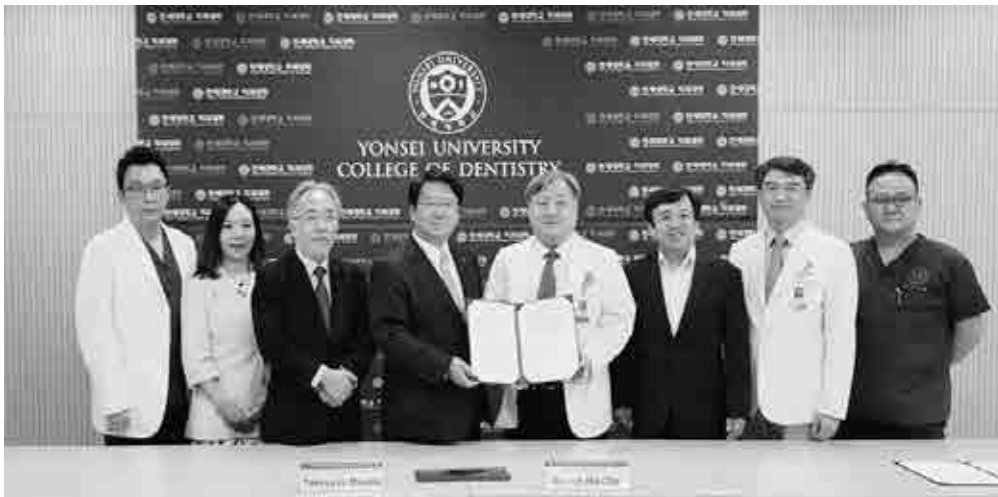
スマトラウタラ大学歯学部（左）、ハントゥア大学歯学部（右）との調印後の記念写真



大韓民国・延世大学歯学部とのダブルディグリー プログラム協定の締結について

新潟大学歯学部と延世大学歯学部はこれまで、本年4月に部局間交流協定を締結するなど交流を深めてきましたが、このたび本歯学部と延世大学歯学部は、本学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻と同大学大学院歯学研究科のダブルディグリープログラム開設に合意し、協定を締結しました。10月4日（金）に協定式が行われ、前

田歯学部長、魚島副学部長が同大学歯学部を訪問し、協定書に署名を行いました。このダブルディグリープログラムは大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻では初めて開設されるものです。本プログラムにより両大学で教育・研究指導を受けた大学院生に両大学から学位が授与されます。



協定締結式後の記念写真

国際シンポジウム (International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment) 開催報告

予防歯科学分野 小川 祐 司

2020年2月10日から12日まで(12日はコミュニティツアー)、インドネシア・バリ島にて、新潟大学歯学部主催、インドネシア・ガジャマダ大学歯学部共催による国際シンポジウム「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment」が開催された。現代社会に対応する実践的口腔医療人の育成がメインテーマの本シンポジウムは今回で9回目となり、日本をはじめインドネシア・タイ・ベトナム・ミャンマー・韓国・台湾・香港・フィリピンから105名の参加となった。

開会式では、前田健康歯学部長、Ahmad Syaifyガジャマダ大学歯学部長による歓迎の挨拶が行われ、続けて参加大学歯学部長による記念撮影が行われた。その後の基調講演では、タイ・コンケン大学Waranuch Pitiphat歯学部長と小野高裕教授の座長のもと、北アイルランド・ベルファスト大学Gerry McKenna先生による「高齢者に対するエビデンスベースの治療方針の確立」が披露され、急速に進む高齢化のなかで口腔保健サービスのあるべき形態が提言された。

特別講演では、本学4名の演者による講演が行われ、大峯淳教授による「マウス切歯における幹細胞について」、照沼美穂教授による「人体におけるアンモニアの産生と代謝のメカニズム」、岡本圭一郎准教授による「日本文化を紹介します！酒は百薬の長か?」、加来賢准教授による「歯根膜の組織幹細胞」と、最新の知見を盛り込んだユニークな内容構成となった。

また、1日目と2日目に各2つの学術シンポジウムが行われた。シンポジウム1は、「高齢者歯科と摂食嚥下—最近の知見」(座長：井上誠教授、

タイ・タマサート大学Matana Pruksapong先生)と題し、真柄仁講師による「舌圧計測に伴う舌挙上運動時における舌骨筋活動の特徴」、Sirima Kulvanich大学院生による「私たちは咀嚼中の嚥下のタイミングをどのように決めているのか?」、坂井遥特任助手による「摂食嚥下障害入院患者における経口摂取獲得のための口腔機能の影響」、長谷川陽子講師による「高齢者の内服薬剤口腔内残渣予防のための基礎調査」と興味深い発表とともに活発な議論が行われた。シンポジウム2「地域における高齢者口腔保健」(座長：タイ・スラナリー工科大学Yupin Songpaisan歯学部長、小川祐司教授)では、葭原明弘教授による「口腔健康状態と認知症および認知機能低下との関連」、ガジャマダ大学Lisdrianto Hanindriyo先生による「インドネシアにおける高齢者口腔保健の展開」、タマサート大学Matana Pruksapong先生による「タイにおける高齢者口腔保健の実践；集中治療室、中間介護施設、長期介護施設での経験を踏まえての研究課題」が披露され、アジアにおける高齢者口腔保健の課題と取り組みが議論された。

シンポジウム3は、「歯周病学における現在のトピックス—進歩と課題」(座長：多部田康一教授、インドネシア大学Benso Sulijaya先生)と題し、多部田康一教授による「歯周治療の現在と未来」、高橋直紀講師による「歯肉上皮細胞をターゲットとした host modulation therapy の可能性」、インドネシア大学Benso Sulijaya先生による「機能性メタボライトを用いた host modulation therapyによる歯周炎治療の現状と将来性」、インドネシア大学Yuniarti Soeroso先生による「インドネシア大学歯学部病院におけ

る他疾患を併発する歯肉増殖症治療」の発表が行われ、歯周病学研究の指針を議論する意義深い内容となった。さらにシンポジウム4は、「最新歯科トピックス・ガジャマダ大学の知見」（座長：ガジャマダ大学Ahmad Syaify歯学部長）のもと、Juni Handajani先生による「口腔上皮細胞における加齢とサイトケラチンの産生」、Trianna Wahyu Utami先生による「インドネシアにおける非木材生産物の植物由来の生理活性成分としての検討」の興味深い講演が行われ、活発な質疑が繰り広げられた。

そのほか、32のオーラル発表と17のポスター発表が行われ、大学院生や若手研究者が英語でのプレゼンテーションに挑戦し、討議を通じて英語力向上を目指す格好の機会となった。

2日目のランチタイムには、参加学部長（代理を含む）を囲んでの新潟大学／ASEAN歯学部長会議が行われ、ガジャマダ大学、コンケン大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、チェンマイ大学、マヒドン大学、スラナリー工科大学、ナレスアン大学、インドネシア大学、マラナタクリスチャン大学、モエストポ大学、トリサクティ大学、スマトラウタラ大学、ハントウア大学、国立台湾大学、台北医科大学、香港大学、ハノイ医科大学、ソウル中央大学、ベトナム医科薬科大学、ヤンゴン歯科大学、マンダレー歯科大学、マニラセント

ラル大学、ベルファスト大学（オブザーバー）の計24大学の出席のもと、新潟大学歯学部と交流協定締結校の間で実施している学部学生、大学院学生、教員の人材交流に関する実績報告のほか、国費留学プログラムを含めた次なるシフトアッププログラムに関して活発な意見交換が行われた。また新作の新潟大学歯学部プロモーションビデオが披露され、参加学部長から称賛の拍手が送られた。

新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される最中での開催となったが、2日にわたっての国際シンポジウムは盛会のもと無事に閉会を迎えることができた。

（開催にあたりご尽力賜りました皆様に改めて御礼申し上げます）



閉会式にて



シンポジウム会場にて



新潟大学／ASEAN歯学部長会議

超高齢社会に求められる基礎・臨床研究 Basic and clinical researches required in a super aged society

摂食嚥下リハビリテーション学分野

井上 誠

さくらサイエンスプランとは、日本・アジア青少年サイエンス交流事業として産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指して日本科学技術振興機構が行っている事業です。本事業の推進により、アジア地域の青少年の日本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジア地域と日本の科学技術の発展に貢献することを目的としています (<https://ssp.jst.go.jp/index.html>)。

新潟大学歯学部では、さくらサイエンスプランの支援により、2020年2月13日から19日まで、フィリピン・マニラセントラル大学より1名、タイ・タマサート大学より1名、タイ・マヒドン大学より1名（他来日経験者1名）、タイ・コンケン大学より4名、インドネシア・ガジャマダ大学より3名、ミャンマー・マンダレー歯科医学大学より2名の若手歯科医師を受け入れ、現在新潟大学で行われている臨床の見学、講義受講ならびに体験実習を行いました。過去3回の内容はこちらでご覧になれます (<http://www5.dent.niigata-u.ac.jp/~dysphagia/sakura.html>)。

プログラムは、全員が来学した2月13日にオリエンテーションを実施した翌日の2月14日にスタートしました。2月14日午前中は、摂食嚥下リハビリテーション学分野担当でした。摂食嚥下障害の臨床をテーマとして、超高齢社会において高齢者を中心とした摂食嚥下障害の現状と一般的な臨床内容、さらに歯科医療が携わるべき口腔機能を起点とした臨床のあり方についての講義を行いました。

午後は、包括歯科補綴学分野担当でした。臨床における咀嚼の重要性に関する講義の後に、グミゼリーを用いた咀嚼能率測定の体験実習を行い、咀嚼障害者の食塊形成の悪さ、嚥下への負担を疑似体験してもらいました。この日の夕方には、親睦を深めるための懇親会も開催され、初日であったにも関わらずお酒が入るとともに会は盛り上がり、それぞれの国や研究の話だけでなく、文化交流という点でも大変有意義な時間となりました。

2月15日午前中は、口腔生理学分野担当でした。痛みのメカニズムに関する講義の後、痛みのモデル動物を用いた行動学的な実験を観察・定量化する生理学実験を経験してもらい、得られた結果と痛みメカニズムの関連性を議論しました。午後は、予防歯科学分野の担当として、高齢化に向かう社会の中で必要とされるヘルスプロモーションに関する講義を行いました。

日曜日の休日をはさんだ2月17日は、摂食嚥下リハビリテーション学分野担当日でした。午前中は、病棟での摂食嚥下障害の臨床見学ならびに嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査体験をしてもらいました。嚥下を可視化する実習体験は初めてのことであり、皆が大変興味を示してくれました。午後は2班に分かれて、経頭蓋磁気刺激（TMS）実験と口腔機能低下症の検査実習を行いました。TMS実験では、自らが被験者となって誘発電位を体感してもらい、その都度大きな歓声があがっていました。口腔機能低下症の検査は相互実習で行われ、慣れない検査であるオーラルディアドコキネシスでは、何名の参加者がテストをパスできずにいましたが、大丈夫でしょうか。午後4時から、う蝕学分野の吉羽永子先生にデンタルシミュ

レータを紹介してもらいました。完全なバーチャルリアリティのシステムを用いた切削トレーニングとその自動評価について学んだ後、仮想患者の診断・治療計画・治療までを体験してもらいました。歯の切削感はもとより、露髄をすると出血するなど、そのリアルさに感動していました。

2月18日は、生体歯科補綴学分野担当日でした。午前中は主にインプラント治療と天然歯の保存について臨床的な観点からの講義を行いました。午後はインプラント関わる生物学的研究、新規生体材料の開発、歯根膜の幹細胞等、生物学的なエビデンスに基づく補綴治療の実現を目指した研究の紹介を行い、研究サンプルの一部を実際に見てもらいました。参加者からは多くの質問があり、活発な議論が行われました。

最終日の2月19日午前、歯周診断・再建学分野担当でした。誤嚥性肺炎の原因菌ともいえる口腔内細菌のコントロールのためにも口腔衛生管理

が必要となることを、症例を交えながら講義しました。また、実際に参加者の口腔内細菌数を測定するハンズオンを行いました。国や専門は違いますが、歯周病への認識は同じであり、超高齢社会における歯科医の役割を全員で共有することができました。

その後の閉講式では参加者から一言ずつのコメントをもらい、全員で記念写真を撮って解散となりました。タイトなスケジュールの中、参加者は新たな臨床、研究分野の体験を楽しみ、また一生懸命に参加してくれたことで忙しくも充実した日々を過ごすことができました。本プログラムをきっかけとして、さらなる交流や共同研究推進への足掛かりができたと確信しています。

最後に、本プログラム実施の機会を与えて頂いたさくらサイエンスプラン、そして本プログラムの実施を支えて頂いた多くのスタッフの皆さんには深く感謝申し上げます。



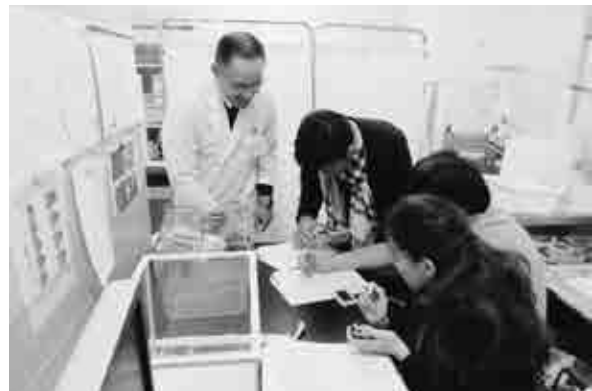
講義



嚥下内視鏡検査見学



TMS体験



実験データ採取



口腔機能低下症の相互実習



デンタルシミュレータ体験



口腔細菌検査体験



咀嚼機能検査体験

タイ・協定校での学術講演セミナーの開催

部局間協定締結校からの依頼を受け、これまで若手教員の育成を兼ね、姉妹校で学術交流を行ってきましたが、本年度はASEAN地域で興味が高まっている高齢者歯科学に焦点をあて、研究者交流セミナーを開催しました。歯学部協定校であるタイ・タマサート大学およびチュラロンコン大学歯学部で、9月24日（火）、25日（水）の両日、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授と包括歯科補綴学分野の小野高裕教授が学術セミナー講演会を開催しました。本セミナーは、タイを始めとする東南アジア諸国でも高齢化が進み高齢者歯科学への関心が高まっている中で、同大の

歯学部長から特に依頼を受け、開催に至りました。セミナー当日は、井上教授から嚥下障害と口腔機能低下症について、小野教授から舌接触補助床（PAP: Palatal Augmentation Prosthesis）の効果について、それぞれ豊富な臨床例ならびに研究成果を交えながら講演が行われました。また、タマサート大学では、摂食嚥下リハビリテーション学分野のスタッフによる嚥下機能に関するワークショップや、小野教授による実際の患者さんに対するPAP作成のデモンストレーションも実施されました。



令和元年度 Student Dentist 認定証授与式・臨床 実習登院式について

令和元年10月4日（金）に、Student Dentist 認定証授与式及び臨床実習登院式を行い、5年次前期までの科目をすべて修め、共用試験CBT・OSCEに合格した学生37名が出席しました。Student Dentist 認定証授与式では初めに大内章嗣副学部長による訓示があり、Student Dentist制度や診療参加型臨床実習の目的などが述べられました。訓示の後には37名の学生に Student Dentist 認定証及び診療衣が授与さ

れ、代表学生が今後の実習に向けての決意を宣誓しました。引き続き行われた臨床実習登院式では、小林正治医歯学総合病院副院長、藤井規孝臨床実習実施委員長から、医療人としての態度や実習に臨む姿勢についてお話がありました。約1年間に及ぶ診療参加型臨床実習が実りあるものになるよう、実習にご協力くださる患者様への感謝の気持ちを忘れずに、学生が真摯な態度で取り組むことを期待しています。

学部長と学生との懇談会の開催について

令和元年12月9日（月）に学部長と学生との懇談会を開催しました。

この懇談会は、歯学部長からの話題提供や学生からの要望についての意見交換を行い、学部運営に役立てることを目的とするとともに、意識の共有化を図る機会として毎年開催されています。今

年度は前田学部長、大内副学部長と各学科・学年の代表者1～2名及び事務職員が参加し、校舎内の自習室や更衣室、学部の授業やカリキュラムに関してなど、さまざまな話題や要望について意見交換を行いました。

特別研究員等審査会専門委員 （日本学術振興会）の表彰について

本学歯学部口腔生理学分野の山村健介教授が、特別研究員事業及び国際交流事業の審査において有意義な審査意見を付した専門委員等として、独立行政法人日本学術振興会から表彰され、12月13日（金）に本学の高橋学長から表彰状を手渡されました。日本学術振興会では、特別研究員事業等の審査の質を高めるため、審査終了後、審査の検

証を行い、その結果を翌年度の専門委員及び書面審査員の選考に適切に反映させています。検証結果に基づき、書面審査において有意義な審査意見を付した専門委員等を選考し表彰することとしており、今年度は約1,500名の専門委員等のうち、表彰対象者の一人として山村教授が選考されました。

ミャンマー・ヤンゴン歯科大学への 医療チーム派遣

新潟大学歯学部はミャンマー・ヤンゴン歯科大学と部局間交流協定を締結していますが、Thein Kyu前学長、Shwe Toe学長より、ミャンマーで患者の多い口唇口蓋裂患者に対する医療支援が要望されていました。昨年度に引き続き、顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授と歯科麻酔学分野

の瀬尾憲司教授による合同医療チームがミャンマーでの医療支援活動を行いました。ミャンマーでは医薬品等が不足しており、いろいろな分野からの支援を必要としていますので、皆様方のご理解とご協力をお願い致します。

留学生交流支援制度（短期受け入れ及び短期派遣プログラム）の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた留学生交流支援制度の採択結果2020年度分）が通知されました。歯学部から短期派遣事業（短期研修・研究型）として応募していた2プログラムが採択されました。

この留学生交流支援制度を用いた学生の海外短期派遣・受け入れは、平成23年度より開始され、

平成30年度末現在で短期派遣された学生の延べ人数は215名、受け入れ延べ人数は250名となっています。特に第三期中期目標期間が開始された平成28年度からの3年間でそれぞれ117名、130名となっています。異文化への理解、国際交流に興味のある学生の積極的な応募を期待しています。

